現代小説に見える女性秘書

原田夏子

はじめに
I　女性秘書の採用
II　女性秘書の業務
III　女性秘書の論議
おわりに

はじめに

近年は組織体においても個人においても、秘書を使用することが多くなり、秘書養成のコースも年ごとに増加している。そして大学・短大・専門学校などの担当者によって、秘書概念の明確化、理論の確立が急がれているようである。しかし現状はかならずしもはかどらず、秘書概念あるいはその職務機能さえなお明らかにされていないと言われている。さらには、銀行・商社などにかなり配置されるようになった女性秘書の実態についても、客観的に知りえているとは言えない。従ってこのような問題の解明は容易でないと考えられる。

思うにそれを明らかにしていく道は、歴史的に存在した秘書的な職種の研究と、現代社会における権力や情報の、集中され行使される状況における秘書的なものの存在や機能の研究といったことが考えられるであろうか。しかしここでは、この両者のような方法を先立てた研究ではなくて、それらと少し違った、現代社会における秘書の実際の状況を明らかにしていく方法を試みようと思う。それは、文学作品に描かれた秘書の様態の解明である。このことを考えるに至ったのは、本学の秘書専攻主任木下雪江教授の示唆をいただいたことが大きい。

たしかに、例えば平安朝の女性たちの日常生活や宮仕えの実態、また女性観を知ろうとするとき、『源氏物語』がいかに多くの手がかりを示してくれることか。一般に文学の中でも物語・小説はいうまでもなくフィクションであって、そのまま事実の記録ではないけれども、ある意味では事実以上の真実を明らかにするものであることは、作者紫式部が自覚して実行したところであって、「日本紀などはただかたそばぞかし」(『源氏物語』蛍巻)とまで言い切っているのである。すぐれた作者の生活体験や知識教養をふまえた社会認識、人間や事象への洞察力の深さ、把握力の強さによって浮彫りにされ提示される問題の重味は、今更喋々するまでもない。

私は昨秋来、女性秘書の登場する小説を集めることからこの仕事をはじめた。当初は、私自身は勿論、周囲に聞き合わせても、そのような小説の心当りはなく、簡単には見つからないのかと思われたが、それでも文庫本の解説目録などを頼りにして、30篇ばかりを読むことができた。これらについて女性秘書の問題を考えてみたい。その中、秘書が外国女性である場合は、雇用者が日本人であってもここでは取上げず、その反対に日本女性であっても勤務先が外国企業である場合もこれをはずした。また元女性秘書が登場する小説もあるが、これも取扱わないことにした。従ってこの小説で扱った範囲は、昭和二十年代以降、日本の作家によって書かれ、現代日本の職場に、現役女性秘書の登場する小説に限った。調査し取上げた小説の主要な点に関する一覧表を文末に掲げておいたので、参照していただければ幸いである。

I 女性秘書の採用

『女秘書を求めています。年齢・美醜は問いませんが、海外へ旅行することもあると思われますので、若く、健康な人の方が適していると考えます。

資格は英会話に堪能で、英文タイプ、英文速記のできる方。給与その他は満足いただけるような条件を、話し合いの上で決めたいと思います。

ご希望の方は、履歴書をもって、直接に御来社下さい。交通費、宿泊料は、採用不採用にかかわらず、お支払いしますから、ご安心下さい。飛行機にお乗りになっても平気です。(『苦い旋律』梶山季之)

右は婦人用のファンデーション販売を仕事としている東京のメルヘン産業KK代表取締役・社長・曄道征四郎の名で新聞に掲載された求人広告である。この作品の女主人公一貫寺邦子はお茶の先生や仲間の夫人から、あなたにピッタリの仕事といわれ応募する。書類選考や筆記試験はなく、風変りな面接テストを受けることになる。A室では大男の外人にドイツなまりの英語で問いかけられ、B室ではスコットランド独特の難解な喋り方の、六十年配の婦人から、目覚めてから此処へ来るまでの行動を三分以内に喋ることを要求され、C室では英文速記のテストを、D室では日本文を翻訳して六分以内にタイプするテストを、そして最後のE室ではホテルの寝室のような部屋で、入ってきた黒人の男に突然迫られるというテストを受け、いずれの関門をも通過して合格となる。このようなテストや採用の仕方は全く特殊で、いかにも小説らしいが、求人広告に出ている条件や資格は、そう特殊というものではないだろう。

大体小説中の女性秘書が、それぞれどのような条件や資格を備えてどこに採用されているのかを順次見ていきたい。すなわち、a学歴、b年齢、c容貌、d性質・能力、e勤務先・専属といった点である。取扱う小説のすべてにこのような点が落ちなく明記されているというのではないが、現代の小説家たちが女性秘書像の造型に当って、どのようなイメージを抱いているかの大凡を知ることができると思うのである。

a学歴

いわゆる学歴として挙げられているところでは、高校卒業者に『社長秘書になった女』(源氏鶏太)の豊成玲子、『乗取り』(城山三郎)の朝倉靖子、『馬を売る女』(松本清張)の星野花江、『肌は死なない』(黒岩重吾)の田園聖子、『茜雲の渦』(同)の藤村香鶴。短大卒業者に『ボタ

ンとハンカチ』（源氏鶏太）の神泉涼子、『昼と夜の巡礼』（黒岩重吾）の香村可和子、『愛の装飾』（同）の沖野妙子、北川順子。大学卒業者に『今日は再び来らず』（城山三郎）の仲という人物の婚約者は女子大英文出、『昼と夜の巡礼』の真月葉子は京都の大学英文出、『多国籍企業殺人事件』（和久峻三）の須磨玲子はW大仏文出、『苦い旋律』の一貫寺邦子は津田塾英文出、『末の末っ子』（阿川弘之）の田崎多美子はSS女子大英文出とある。こうして例をみる限り、学歴としての高校・短大・大学の扱いに大した差はないようである。ただ大学出のものがみな英文や仏文専攻であるのが注目される。しかし今後もっとこの種の小説がふえた場合、あるいは変化が出るのかも知れない。

データ

15人中	
6人	高校卒
4人	短大卒
5人	大学卒

b 年齢

年齢という点では二十代が圧倒的で、その中、二十代を出たばかりのものに『最高殊勲夫人』（源氏鶏太）の野々宮杏子、『肌は死なない』の田園聖子、『三等重役』（源氏鶏太）の久保青子、『大銀行の内幕』（広瀬仁紀）の浅岡由美、『昼と夜の巡礼』の香村可和子、『愛の装飾』の北川順子が挙げられ、二十代半ばのものに、『愛の装飾』の沖野妙子、同じく社長夫人秘書、『茜雲の渦』の藤村香鶴、『多国籍企業殺人事件』の須磨玲子、『幻の美女』（三好徹）の中条真弓が、二十代終りのものに『最後の運』（源氏鶏太）の三浦節子、『ボタンとハンカチ』の戸倉理以子、『男と女の世の中』（源氏鶏太）の三谷英子、『腐った太陽』の佐伯加津子、『昼と夜の巡礼』の真月葉子、『コンピューター殺人事件』（藤村正太）の牧原郁世、『末の末っ子』の田崎多美子ら。そして三十歳以上のものは例が少いが、『多国籍企業殺人事件』の植木里子は三十歳前後、『馬を売る女』の星野花江と『朝ごはんはぬき？』（田辺聖子）の明田マリ子とは共に三十一歳、そして『ボタンとハンカチ』の正井克子は三十五、六歳とある。

データ

23人中	
19人	二十代
4人	三十代

c 容貌

上述の求人広告には、美醜は問わないと出ていたが、採用された一貫寺邦子はなかなかの美貌と想像できる。それは、作中では彼女の容貌については詳しくふれていないけれど、お茶の先生である藤野登志子、及び社長嘩道征四郎の、二人ともが大層な美貌の持主であって、邦子は藤野登志子に見染められて同性愛に陥り、登志子の事故死の後、社長の愛をうけ入れることになる女性であるからである。そのほかの作品のほとんどが『美人』『美貌』『美しい』『綺麗』というような言葉で女性の容貌を評している。勿論顔ばかりでなく姿形の美しさにも触れていて、例えば『腐った太陽』の佐伯加津子については、「身長こそ五尺三寸五分だがすらりと伸びた足、イタリー人を思わす線のきついマスク。褐色がかった肌は、微妙な脂がにじみ出すように輝いていた。」と記し、『女のそろばん』の長田清美については、「中背だが、日本人ばなれしたプロポーションである。すらりと伸びた脚は濃いめのベージュのストッキングに包まれていて、やはり濃茶のタイトスカートの中にかくれている。腰がきゅっと上に張っているので、その分、脚が長く感じられた。胴が短く、肩甲骨がぐいと背骨に近づいている。いつも姿勢のいい女だった。」と詳しい。

あるいは『乗取り』の朝倉靖子の、形のよい、しなやかな脚を、『昼と夜の巡礼』の真月葉子の、均斉のとれたきしゃな体、なめらかな肌を、讃えている。こうした美人秘書は、『乗取り』の主人公である青井産業社長青井文麿にとって「キャデラック同様、示威上必要なアクセサリー」であって、彼の秘書の朝倉靖子は、ミス七夕コンクールに落選したのをスカウトしたその中の一人である。こうした秘書アクセサリー論は特別としても、女性秘書を美貌の持主とすることは、小説としての複雑な展開に深くかかわっているところであって、秘書でなくても小説の女主人にはえてして美女が多いのである。

しかし、以上のような美貌の女性秘書ばかりでない例を、『馬を売る女』の星野花江や、『女のそろばん』の山岸光江に見ることができる。星野花江は「眼は白い部分が多いので、その中の小さな瞳が鋭く見え、」「眼尻に小皺があり」「声はわりに澄んでいて可愛らし」いが、「筋肉質の痩せた身体」の持主である。また山岸光江も色だけは白いが「やや低めの、味もそっけもない声」、「器量はお世辞にもいいとはいえない。色気もなく」、「イギリスのテニスの女王といわれた女に、体つきがよく似ている」大女という手ひどい批評である。前者の星野花江の社長は、もっと若い美人秘書を望まぬではなかったが、彼女が有能で口が固く、節度をこころえており、つき合いのない孤独に徹している姿を秘書としてはいっそ好もしいとして、手放しがたく思っているのであり、後者の山岸光江の場合も、お手伝いをも家政婦をも決して美人を採用しないという小野寺コンチェルン社長夫人の意志の結果なのである。

このような例もあるけれども、一覧表の就任事由をも含めてみるのに、概して女性秘書の美貌が小説ではかなり大きな採用条件になっているといえよう。

データ

26人中	
美人	その他
23人	3人

d 性質・能力

次に性質、気性について見渡すとき、いくつかの特徴をあげることができるかと思う。その第一は、「どこかおっとりしていて、そのくせ、よく周囲に気をくばってい」、上司の中西課長がかねてから「いい女房になる娘」と思っている豊成玲子(『社長秘書になった女』)、に見られるような女性である。同様な例として、神泉涼子(『ボタンとハンカチ』)も「一口にいえば、爽やかな娘」で、『この娘ならきっと将来いい奥様になるのではないか』と人も思い、本人もその気でいる女性であり、真月葉子(『昼と夜の巡礼』)も容姿とはうらはらに派手なところがなく、秘密の関係をもつ事業本部長榊原良介と街を歩く時は、たとえ場末でも並んで歩かず、榊原をして「大学を出ていて、君のように古風な行動を守り続ける女性は居ないね。」と感歎させ、「君が結婚したら、きっと良妻賢母になるだろうな」と言わしめるのである。この真月葉子の場合は、二人の秘密な関係を長続きさせようと思えばこその慎重な行動であるのだが、それにしても、現代女性としてはその心づかいが当世風でないと言えるのだろう。また、清潔、ハツラツ、さっぱりした気性で、その名の「杏の実のように、なかなか、酸っぱいところもあり」、健康で庶民的な印象の野々宮杏子(『最高殊勲夫人』)や、それ程美人ではないが女らしく、専属が代っても旧専務の相原徹に実を尽くす三浦節子(『最後の運』)、愛くるしい久保青子(『三等重役』)、そそっかしく遅刻がちで、雇主の作家野村耕平を閉口させるところがあるが、「明るく可愛いい品のよい娘」の

田崎多美子(『末の末っ子』)等も大体同列の女性と考えられる。そして真月葉子を除いて、これらの女性たちはいずれも幸福な結婚に到達するのである。このことは、性質・気性の面から好ましい女性秘書像はそのまま望ましい女房像と合致することをあらわしている。

その特徴の第二は、男性顔負けの仕事をするような秀れた能力をもつものの性質・気性である。大手の大東物産社長秘書の正井克子(『ボタンとハンカチ』)は三十半ばという年齢で知られる秘書のエキスパートであって、社内外の情報収集力にかけては右に出るものがいない。美人で若さを失なっていないが、「顔のどこかにケンがあり」、「性格の強さを現わしているよう」な女である。社長秘書を鼻にかけているようなところが見え、近寄り難さがあるので、社内の蔭口はさんざんである。うっかり手を出してしまって十年になる社長は、それが弱みとなって、正井克子の独断専行のやり方に対しても強いことがいえない。社内では「癌」とか「淀君」と諷して、その追放をはかろうとするが、社長に進言する勇気あるものが出ない。社長もわかってきているが、正井秘書の得てくる社内外の正確な情報が貴重で、ポスト維持のためにも手を切ろうなどとは少しも思っていないのである。この正井克子は極端な例としても、勘の良さ、機転の早さ、聡明さをもち、従っててきぱきと仕事が出来る能力をもっているものとして、浅岡由美(『大銀行の内幕』)、北川順子(『愛の装飾』)、山岸光江と長田清美(『女のそろばん』)、植木里子(『多国籍企業殺人事件』)、明田マリ子(『朝ごはんはぬき?』)が描かれている。そして前述した星野花江(『馬を売る女』)、もこの類である。

その特徴の第三はコケットリーという点である。その例にも真月葉子(『昼と夜の巡礼』)、をあげることができる。彼女は某商事会社専務から「感じの良い飛行機のホステス」と、また勤務先の世界金属工業の社長から「インテリやが、芸者のようなところがあるな」と評され、情事の相手の事業本部長榊原良介からも、三百万円を預けられて、「バーをやらないか」といわれるのである。これらの言葉は、「葉子の性格の一部を突いていたのは事実のよう」で、榊原の不意の失踪の後、会社を辞めて本当にバーを経営することになると、長らく大会社で秘書をしていたこともプラスとなり、すぐにハイクラスの客の人気を得ていくのである。

もう一人佐伯加津子(『腐った太陽』)をみよう。彼女は高級コールガールとして出遇った、大阪の宮内産業社長に救われ、その秘書として尽くす女性である。生来派手好きで、「勝気さと虚栄心とが、かなりの比重で巣喰う」性格であり、日本人ばなれのした容姿や泥沼の女性とは思えぬセンスの豊かさがあった。従って、所属の天王寺クラブのドル箱であり、相手はいつも一流会社の重役、社長、外人であったのである。このような存在であったので足を洗ったのちもそのクラブの主宰者北野世一につきまとわれる。宮内も北野も終戦直後の暗い生活の部分でつながっており、その宮内は経営不振の噂の中で水死体となって道頓堀に浮ぶ。その死に疑惑をもつ加津子は身をすててコケテッシュな行動をもって真相の解明に奔走し、ついに北野を追いつめて社長殺しを自白させた上で、部屋にガスを放ちつつともに、彼女も宮内の後を追うのである。

例が少いのに加えて、バーのホステスやコールガールと秘書とを同日に談ずるのは不謹慎のそしりをまぬがれないであろうし、接客の仕方にも自ら厳とした違いがあるのは勿論である。しかし小説家が有能な美人秘書をバーの最良のホステスとして、また美貌の高級コールガール上りを「中小企業の産業会社としては大きい方」の社長秘書として設定し扱うことは興味深い。バーのホステスやコールガールという、秘書とは異質に考えられる中に、案外に秘書的なものの解明の一つの手がかりがあ

るかもしれないと思うのである。

その他、小説中には英語・仏語といった外国語、英文タイプ、英文速記などに堪能なものを描いており。女性秘書を一段と魅力的存在に見せているようである。このようにタイプをわけてみても、相互に重なり合う点もあり、画然と区分することは実はむつかしい。

データ

33人中			
8人	家庭夫人タイプ	12人	業務有能タイプ
5人	コケティッシュなタイプ	8人	?

e 勤務先・専属

次には、これらの秘書の勤務先をしらべると、銀行につとめるものに仲の婚約者や浅岡由美があり、後にふれるような個人の秘書として勤務したものを除き、あとはひとしく、会社となっている。その会社の半数は、大東物産、十村電機、世界金属工業、小野寺コンチェルン、小笠原石油、新都梱包運輸、共立自動車に代表される大手企業である。

また専属は豊成玲子・正井克子・三谷英子・朝倉靖子・星野花江・佐伯加津子・真月葉子・藤村香鶴・山岸光江・須磨玲子・一貫寺邦子らが社長の秘書として登場、植木里子も社長のプライベートな秘書である。三浦節子・田園聖子・牧原郁世・小島智子らは専務秘書となっており、ついで銀行の頭取秘書の浅岡由美、同じく支配人秘書の仲の婚約者、会社会長秘書の長田清美、複数の重役秘書の神泉涼子らがいる。また例は少いが、個人の仕事をするものが圧倒的能力をもつもの、(小説家等の執筆者や、研究者、弁護士、医師、政治家などを指す)の秘書も登場しており、中条真弓は女性インテリアデザイナーの、明田マリ子は女性作家の、田崎多美子は男性作家の秘書である。これらを見る限り、やはり会社や銀行のような企業組織の社長・頭取といったトップの秘書が最も多く、専務秘書がそれにつづいている。この事情は現実社会を自ら反映しているように思える。なお官公庁や病院などの組織体にも現実には女性秘書が働いているから、それを舞台とした小説も、今後出てくるかもしれない。

一方勤務先の地域は東京が半ばを占め、『今日は再び帰らず』のZ銀行、『大銀行の内幕』の東洋銀行本店、『馬を売る女』の日東商会、『茜雲の渦』のスズ商事、『女のそろばん』の小野寺コンチェルン、『コンピューター殺人事件』の新都梱包運輸、『重役室』の共立自動車、『苦い旋律』のメルヘン産業等それにあたる。さらに、ここで扱った黒岩重吾氏の小説は『腐った太陽』の宮内産業も『肌は死なない』の十村電機も『昼と夜の巡礼』の世界金属工業も、『愛の装飾』の大森建設もすべて大阪が根拠地になっている。これは黒岩氏が生粋の大阪人であることに深くかかわっていよう。また『多国籍企業殺人事件』の小笠原石油も本社が大阪にあるが、作者の和久峻三氏も大阪生れという。同じ作品に出る海野海運は神戸にあるが、これも作者にとっては馴じみ深い土地柄と思われる。日本の企業組織体の分布状況からすれば、ごく常識的に考えても、東京や大阪や神戸がその活躍の舞台になることは、自然であろう。

データ

33人中						
勤務地		専属		勤務先		
21	東京	12人	社長	28人	会社	
10	大阪	7人	秘書室	2人	銀行	
1	神戸	4人	専務	3人	作家など独立自営業	
1	他	3人	作家など			
		7人	他			

II　女性秘書の業務

a 一般的なもの

女性秘書の仕事を具体的に挙げている作品は半数をこえる。『大銀行の内幕』では「来客簿の整理か、あるいは頭取の原島謙三の、行内における会議、打合せのスケジュールの調整、秘書課員から出された接待費や交通費などの、こまごまとした精算伝票の処理が主たる業務」と説明しているし、『昼と夜の巡礼』の真月葉子は社長秘書といっても、「中小企業の秘書のように、会社の秘密をなにからなにまで知ることはできず」、それは秘書課長の役目で、葉子の場合は主に、富岡社長のスケジュールの作成や保管、来客の接待などの仕事とされている。その他の作品も、来客接待、電話の取次ぎ、手紙・書類の整理、車の送迎などを秘書の仕事としていることはほぼ共通している。

b 拡大されたもの

しかしもとより小説の性質として一般的でない活動状況が描かれているのは当然である。その有様はいうまでもなく千差万別でそこに面白さもあるが、ここにその典型的な一つのドラマチックな例をあげてみよう。それは『肌は死なない』の田園聖子の場合である。彼女は一年前は八階建てのうち五階までを使用している十村電機の階下受付にいた。それが三ヶ月たって四階の総務部の受付に変り、現在は五階で専務秘書になっている。この高校卒業の娘の異例な出世に、日本経済タイムスという業界紙の発行者、兼総会屋として凄腕の過去を秘めた人物美杉恵伍が疑惑を抱き、話は展開されてゆく。そして謎を秘めたまま聖子は自分のアパートから行方不明になり、やがて暴行扼殺死体となって発見されるのである。この聖子の謎は、事件にまきこまれた美杉や、警察の探索で解きあかされてゆくが、結局専務横原が自分の権力欲から、高島秘書課長の弱味につけこんで聖子との関係を命じ、その上で聖子を重要な客の接待に利用する。聖子は顔色も変えずそれに応じて、その代価を得ていたのを、今度は止めるといい出したばかりでなく、千万円を要求する。彼女はつぶれた西峯証券の清算事務を長いことしていた女で、西峯証券を舞台にした横領事件を彼女からほのめかされた横原が、身の危険を覚えて殺害することになるのである。この聖子は専務秘書になると同時にタイムレコーダーからはずされ、聖子だけの出勤簿がつくられていた。そのわけを人事課長は、「社の最高機密を帯びて出張することがある」からだと話していたのだが、社の最高機密にかかわる仕事をし、それに乗じて自己の欲望を遂げようとするこのような構造が、ひとつの激しいかたちとなった例である。

c 調和の問題

『茜雲の渦』の藤村香鶴や『昼と夜の巡礼』の真月葉子のように社の重要な経理にタッチすることなく、会社の秘密を何から何まで知ることはできない立場でも、それぞれ社長や事業本部長と関係があることで、社の経済状態などをおのずから知るようになっていく。秘書は専属上司のプライベートな用事も仕事のうちとされ、たとえば大東物産の上村秘書課長の教え(『ボタンとハンカチ』)のように「重役の私用は公用に準ずることになっているのだから、いい直すと、重役の私用のお手伝いをすることによって、それだけ重役に社用に精を出して貰うのだ。」ということにされるようである。このような立場におかれる秘書、とくに女性秘書が、その立場上の有利さを発揮して活動することは、いかにもストー

リーとして興味あることになるわけであるけれども、その仕事の範囲と限界とをわきまえて、あやまらぬ道を辿るのは思うに大そうむつかしいことであろう。

Ⅲ　秘書についての論議

今まで見たように、小説に描かれている女性秘書像は、具体的な仕事役目を総合してみるとき、すでに小説家のもつイメージは語られているのではないかと思う。しかし、これに加えてさらに、作者が作中で秘書について直截に論じているところのある作品は何といっても注目に価するので、その代表的ないくつかに触れてみたい。

a『ボタンとハンカチ』（源氏鶏太）

このユニークな題名は、秘書の仕事の範囲と限界を比喩的に巧みに表現したものである。前にも触れた神泉涼子の直接の上司である上村秘書課長の教えるところによれば、女性秘書が重役から私用を頼まれた場合、洋服のボタンをつけてくれといわれたら、つけて上げるべきだが、ハンカチを洗ってくれといわれたら断るべきだろうなという。その意味について彼はなお次のように続けている。

> さっきもいったように重役の身辺の世話をするのが秘書の仕事の一つである。が、ハンカチまで洗って上げるのは行き過ぎだ、ということ。ボタンをつけるのも、ハンカチを洗うのも、そこにたいした違いがないようだが、しかし、ハンカチというと、それは奥さんの領分になる。いくら秘書でもそこまで入って行くと間違いが起こりやすい。これは、あくまでたとえです。勿論、わが社の重役には、そこまで頼むような人はいない。その点は、安心してよろしい。が、一事が万事。いつも、ボタンとハンカチの違いについて考えておいて貰いたいのだ。

と。そしてとかく秘書という仕事が誤解を招きやすいことをよく心得るように注意しているのである。以後このボタンとハンカチという比喩は何かの折ごとに涼子の心に浮び、自重、抑制の作用をしつづける。同じ秘書課勤務で隣席の若い沖村武志の洋服のボタンをつけ直してはやったが、結婚までは、そのハンカチを洗っていけないのだと思うように。

さらに挨拶に出向いた涼子に対して社長は、秘書という仕事の生易しくないこと。他の社員たちとは、仕事の内容が全く違うこと。あくまで仕事に忠実に、しかも責任をもつこと。やり直すという信念、恐れないこと、堂々と立ち向っていくことを訓辞し、副社長は正井克子と戸倉理以子の二人の先輩秘書を比較して、自分で考え、心の中に答えておくこと、自分を大切にすることを注意したのである。

この作品は短大を卒業して資本金百億、社員総数五千人の大東物産株式会社へ入社した神泉涼子を主人公としており、彼女は一ヶ月間の実習の後女子新入社員二十人の中からひとりだけ選ばれて秘書課に勤務し、五人の重役共通の秘書となる。先任の社長秘書正井克子、副社長秘書の戸倉理以子という美貌でベテランの女性たちの、正反対の性格とそれぞれの上司を立てたい余りの反目、嫉妬に巻きこまれそうになりながら、秘書の仕事を通して人生勉強を重ね、人間的に成長していき、隣席の若々しい沖村武志への愛を実らせるであろう期待を読者にもたせて終る。そして雷社長の死は、社長とハンカチの仲だった克子に敗北をもたらすものであったが、彼女自身の大株主手塚への進言と移籍によって元副社

長の新社長には専属の女秘書をおかないことに決定し、戸倉理以子は会社を辞め、ここに久しい社内の癌の問題は解決するのである。この小説が三人の女性秘書のありようをいわば弁証法的に描いてみせたと思われる点が興味深い。対立する克子と理以子の両方につかず離れずの距離を保ちつつ、秘書の仕事に馴れ、二人からも学び、望ましい秘書へと自覚的に次第に成長していく様子が見えるからである。ボタンとハンカチの比喩は女性秘書の大事な勘どころのひとつを押えていると思われ、ほかに例を見ない女性秘書小説ともいえよう。

b『末の末っ子』（阿川弘之）

五十二歳の小説家野村耕平は、妻に赤子が生れることになって驚きあわてるが、山積する雑事や長編連載の仕事などに困って秘書を雇うことにする。そして小説家仲間の進藤蟻喰亭の世話でくることになったのが「セクレタリーの仕事にすッごくあこがれて」いたという田崎多美子である。そのために耕平は「僕の仕事には、憧れるような華やかさは何も無い」、「学者の秘書なら、国際会議に出て、お得意の英語・フランス語で大いに活躍する機会もあるだろうし、財界の重役の秘書なら、内外知名人とのアポイントメントをてきぱきさばいて行くとか、そういう愉快さがあるだろうと思うけれど、古い軍艦の資料調べじゃ、どうもね」と念を押しておくのである。テレビタレント並みに多忙な仲間の進藤はすでに秘書をおいているが、彼の言によれば、秘書の仕事とは、小説家に押寄せるありとあらゆる雑用の電話と来客（誰とかを励ます会の発起人依頼、今度の国鉄ストについてのコメント、読者からの問合せ、結婚式出席要請、クラス会に来て面白い話をせよ、等々）をやんわりとさばいてもらうことという。「一人でひっかぶって誠実に一々応対していた日にはものを考えるひまなんてありゃしないからね」ということなのである。これらのことばは小説家のような個人が圧倒的な実力をもって仕事をしている場合の秘書の役目を尽しており、前には秘書アクセサリー論をみたが、これは秘書防波堤論ともいえよう。つまり雑用の防波堤になってくれることが、作家にとって何よりありがたいことで、秘書への給料はその安心料だというのが、進藤の見解なのである。

c『苦い旋律』（梶山季之）

この作品に注目するのは、前記求人広告と共に、秘書についての解説を作者が試みているところがあるからである。「――秘書。」という項目を立てて、セクレタリーの語の意味、漢語の秘書の意味を記した上で、アメリカと日本の秘書の違いをのべ、日本の女性秘書の仕事が、電話の取りつぎ、お茶くみ、上司の身の回りの世話などに限定されることが多いとする。この作の女主人公一貫寺邦子は、アメリカ的に、タイプ、速記、書類整理、秘書実務などをやらされるが、彼女の勤先のメルヘン産業が米国の〈ドリーム社〉と提携して、ファンデーションを売り出す会社だからであろう。

また、秘書実務とは、手紙の受信・発信。来客の応対。電話・電報の扱い。旅行・会議の準備。報告書の作成。調度・備品の整備というようにあげており、その他の必要な知識技能の説明も詳しい。さらに取引先のある会社から、新社屋落成の披露パーティ出席の招待状が舞い込んだと仮定して、秘書たるものの取るべき判断・処置についての、ノウハウを次のように説いている。少し長いが引用しよう。

この招待状を、社長にみせて、

――どうしますか？

と訊く位だったら、秘書は不在に等しいのだ。

秘書たる者、先ず招待状をうけとるや否や、経理部や営業部の担当者に電話して、その会社との一か月の取引額、取引年数、将来の見通しなどを問い合わせ、社長自身が出席すべきか、代理人を出席させるか、あるいは祝電だけで欠席するかを、決めねばならなかった。

つぎに慶弔についての記録簿を調べ、過去の似たケースを探し出し、その結果、社長に招待状をみせて、

「営業では是非、出席して頂きたい意向のようです。過去の例では、お祝い金三万円ぐらいとなっておりますが……」

と報告しなければならぬ。

と。つまり、社長の下す決断に、このように助言するのが、秘書の仕事秘書本来の仕事だというのである。

この部分は、メルヘン産業に入社したばかりの邦子のところへ、広告代理店の専務をしている叔父が仕事で訪れ、秘書の邦子に社長への取りつぎを頼むところにつづいている。そのとき社長は部屋に内鍵をかけ、附属しているプライベートな個室に入っている。邦子が彼女しか知らない秘密の電話をかけつづけた末に出た社長は、なぜかめずらしく不機嫌に忙しいからと断わらせるのである。この秘書論は、そのことに首を傾げる新米秘書の邦子に対する教育とも考えられ、あるいは小説中にはさんだ、話の進行からはや、離れた女性秘書論の展開とも考えられる。いずれにしても作者の女性秘書への関心の深さが窺えるように思う。

他の小説中にも、女性秘書への見方、とらえ方を知るところは少くないが、ある程度まとまっている論議の代表例として、以上の三作品を見てきたのである。

おわりに

以上、女性秘書の登場する現代小説二十三篇によって、その取り上げ方描き方を見てきた。この中、女性秘書が主人公となっている作品を特に挙げれば次の九篇であり、決して多いとはいえない。

『最高殊勲夫人』野々宮杏子
『ボタンとハンカチ』神泉涼子
『馬を売る女』星野花江
『腐った太陽』佐伯加津子
『昼と夜の巡礼』真月葉子
『愛の装飾』北川順子
『茜雲の渦』藤村香鶴
『苦い旋律』一貫寺邦子
『朝ごはんはぬき？』明田マリ子

しかしこれらの作品においては、たしかに女性秘書の活躍は生き生きしており、小説の構想上、女主人が秘書であればこそ成り立つものであろうとうなずける点が多い。この種の小説の登場は、昭和二十年代後半に出た『三等重役』などを特別に早い例として、大勢は三十年代以降といえるようである。さらに小説中の女性秘書の多くが、銀行・会社に勤務しているＯＬであり、そうしたサラリーマン物や、企業経済小説と称される小説の急増と共に、今後女性秘書もその中に多く描かれると思われる。三十年代以後のこのような小説は、日本経済の高度成長と、その後の停滞不況や国際化情報化時代への突入等と密接なかかわりをもって

いることは明らかであるからである。

女性秘書の問題の手がかりを小説中に得ようとするためには、なお女主人公たちの活動を、紆余曲折して複雑に展開する物語の世界にわけ入って細かくみていく必要があるが、その点は稿を改めたい。調査の例が十分でないことは残念であるが、本論の各章各段において述べたところによって、現代小説を通してみた女性秘書のイメージを、ある程度結晶することが可能ではないかと思う。

六〇・三・三一記

No.	小説	作者	女性秘書	勤務先	専属	就任事由	秘書勤務	小説の初出年	使用テキスト（文庫名）
(1)	社長秘書になった女	源氏鶏太	豊成玲子	東京 会社	社長	社長の目にとまる	入社4年目	昭和46	角川
(2)	最後の運	源氏鶏太	三浦節子	東京 K化学工業	専務	一目で気に入られる		45	角川
(3)	最高殊勲夫人	源氏鶏太	野々宮香子	東京 三原商事	秘書室		新入	33～34	角川
(4)	ボタンとハンカチ	源氏鶏太	神泉涼子 正井克子 戸倉理以子	東京 大東物産	五人の重役 社長 副社長	新入社員中より選ばれる	新入 10年余 7年	40～41	角川
(5)	男と女の世の中	源氏鶏太	三谷英子	大阪 日電気工業	社長	社長夫人の紹介		37	新潮
(6)	三等重役	源氏鶏太	久保青子	小都市 南海産業	秘書室	経理課から抜擢	半年	26～27	新潮
(7)	腐った太陽	黒岩重吾	佐伯加津子	大阪 宮内産業	社長	コールガールから社長に救われ	半年	36	角川
(8)	肌は死なない	黒岩重吾	田園聖子	大阪 十村電機	専務	専務が受付より抜擢		37	文春
(9)	昼と夜の巡礼	黒岩重吾	真月葉子 香村可和子	大阪 世界金属工業	社長 秘書課		5年	39	角川
(10)	愛の装飾	黒岩重吾	沖野妙子 北川順子 桃井エリ 社長夫人秘書	大阪 大森建設 東京 大森建設支社 大阪 東田電機	秘書課 工事現場事務所長 秘書室 社長夫人	事務所長の希望 ただひとり抜擢	1年少し	38	角川
(11)	茜雲の渦	黒岩重吾	藤村香鶴	東京 スズ商事	社長	元の会社の倒産で移籍		50～51	集英社
(12)	乗取り	城山三郎	朝倉靖子	東京 青井産業	社長	ミス七夕コンクール落選者よりスカウトされる	3年近い	35	新潮

(13)	今日は再び来らず	城山三郎	仲の婚約者	東京 Z銀行	支配人			52	講談社
(14)	大銀行の内幕	広瀬仁紀	浅岡由美	東京 東洋銀行	頭取	頭取の眼鏡にかなう		54	角川
(15)	馬を売る女	松本清張	星野花江	東京 日東商会	社長		13年	52	文春
(16)	女のそろばん	平岩弓枝	山岸光江 長田清美	東京 小野寺コンチェルン	社長 会長	社長夫人の意志 会長の意志	5年	53〜54	集英社
(17)	多国籍企業殺人事件	和久峻三	須磨玲子 植木里子	神戸 海野海運 大阪 小笠原石油	社長 社長個人	W大先輩の女常務の推薦		48	講談社
(18)	コンピューター殺人事件	藤村正太	牧原郁世	東京 新都梱包運輸	専務			46	講談社
(19)	重役室	清水一行	川添則子 岸本良子 小島智子	東京 共立自動車	秘書課 専務	社長新任時調査部から抜擢		45	集英社
(20)	苦い旋律	梶山季之	一貫寺邦子	東京 メルヘン産業	社長	女秘書求人広告に応募、合格	新入	43	集英社
(21)	幻の美女	三好徹	中条真弓	東京 インテリアデザイナー	デザイナー個人			49〜50	集英社
(22)	朝ごはんぬき？	田辺聖子	明田マリ子	大阪 女流作家	作家個人	作家と同級の高校教師の紹介	新入	51	新潮
(23)	末の末っ子	阿川弘之	田崎多美子	東京 男性作家	作家個人	作家仲間の女秘書の友人	新入	50〜51	文春